

## 懐かしかった長崎の山々 ②



### 雲仙—平成新山の威容 実感する自然のすごさ

10月19日雲仙温泉の有明荘を出発した同窓生一行は宿のマイクロバスで9:15仁田峠へ。

人数は19名に増えている。ロープウェイを使わずに、傾斜のきつい登山道を歩く。足元にはシロヤマギクなどキク科の数種類が地味な花を咲かせてい

仁田峠の仲間達。背後中央が普賢岳。右の高いピークが平成新山。妙見岳展望所からの眺望は43年前にも見ているのだが、千々石湾くらいしか地名が思い浮かばない。長崎在住者に教わりながら山名、地名を同定していくが、記憶とはなかなか繋がらない。雲仙は観光地だと言うことで、高校時代の登山対象にはならなかったから記憶が薄いのだ。

妙見岳から同様に険阻な道を辿って国見岳へ、そしてかつての最高峰・普賢岳(1359m)に登頂。普賢岳山頂からは平成新山(1486m)が目前、荒々しいむき出しの山肌、そそり立つ溶岩ドームの山頂。今は静かだが、平成2~3年にあの大災害を起こした活火山で、その時できたこの雲仙での最高峰なのだ。

改めて自然の力のすごさを実感する。

下りは注意深く歩いて、15時過ぎ仁田峠に下り立つ。花はモミジガサ、ツクシアザミ、ヤマヒヨドリなど。



シロヤマギク(キク科ヤマギク属)

### 島原の動乱の歴史を学ぶ

翌20日は島原半島の歴史を学ぶバスツアーとなった。事の始まりは飯嶋和一著の小説「出星前夜」(大仏次郎賞受賞)の読后感想からであった。

この小説は江戸時代初期の1637年~38年に起こった「島原の乱」を題材にしている。この「乱」は私たちが小さい



モミジガサ(キク科コウモリソウ属)



ツクシアザミ(キク科アザミ属)

頃はキリシタン弾圧とそれへのキリシタンらの反乱として描かれたりしていた。確かにその側面は大きく、民衆が団結する旗印としてのキリスト教の役割は重要だったに違いない。

しかし、「島原の乱」の基本的性格は重税・苛政に苦しんだ農民・民衆の「百姓一揆」と考えられ、そして「出星前夜」は事実の丹念な調査を踏まえて、

物語りとしての展開の中に、この「乱」の性格をも描き出している。

さて、この「島原の乱」そのものも興味津々たる魅力を秘めているが、もう一つ同窓生の関心と呼んだのが、「乱」の戦後処理としての「殖民」と、その後の経緯だった。

島原半島、特にその南部(南目＝みなんめ)では「乱」にほぼ全員が参加した村も多く、参加者は立てこもった原城で全滅させられたから、無人の村々が出来た。幕府は「領民」をつくるために各藩に命じて「移民」政策を実行し、各地からの集団移住者たちが半島南部の村々に住みついた。そして、その子孫たちが代を重ねて今日に至っている。同窓生の中にも当然「子孫」がおり、その一人による所謂「ルーツ探し」が始まったのだ。



てっぺんまでの段々畑が見事(南串山)

この日の「島原歴史探訪ツアー」はその「ルーツ探し」途上の成果に基づくもので、行く先々で郷土史研究家の人々の出迎えと案内があり、意義あるツアーとなった。改めて感謝したい。

少し横道に逸れるが、上記の「移住させられた」人々が、夫々のお国言葉を持ちこんだので、島原地方は「言葉のモザイク状態」となり、今日なおその影響を残していると言う。少年時代の私にとって「島原弁」というのは特別に難解な言葉だったが、その難解さはこうした事情にも起因しているようだ。

さてこのツアーで、私たちは島原半島の歴史の断片を幾つか学んだが、キリシタン弾圧に先立ってキリスト教宣教師たちの扇動による仏教弾圧・寺院仏閣破壊が行われたことも知った。

宗教が政治権力を利用し、また政治権力も宗教を利用することは古今東西あまたの例があるが、「政教分離」はそうした歴史を踏まえて人間社会が到達した歴史の教訓であり、「近代民主主義の原則の一つ」であることを改めて痛感させられた。

以上 131 号



小豆島からの移住者の墓地(南串山)